

The *Worcester Ethics Commentary* and its background:
Commentaries on *Nicomachean Ethics* in 13th century Europe

Taki SUTO

Abstract: In this paper, I discuss commentaries on *Nicomachean Ethics* in 13th century Europe to show the significance of an anonymous commentary on *Nicomachean Ethics* in the ms. Worcester Cathedral Library, Q. 13. The question-commentary has characteristics similar to those once called “Averroists’ commentaries”, *i.e.*, the *Ethics* commentaries written by Parisian masters of arts in the late 13th century. There are, however, elements peculiar to the Worcester commentary and aspects that resemble work written by John of Tytynsale, a contemporary Oxford master of arts. Hence, I conclude that the *Worcester Ethics Commentary* was probably produced at Oxford. I believe that a critical edition and a study of this ignored *Ethics* commentary will shed a light on the teaching of philosophical ethics in late 13th century Oxford, of which little is known.

『ウスター倫理学注解』とその背景

—— 13世紀西欧の『ニコマコス倫理学』注解書 ——

周 藤 多 紀

§1：序

13世紀、アリストテレスとの本格的な再会によって、西欧思想は大きな変化を遂げるようになった。すでに6世紀、ポエティウスがアリストテレスの論理学書のラテン語訳と注解を手がけていた。このうち『カテゴリー論』と『命題論』の翻訳と注解は全面的に残り、中世初期から影響力を持った。12世紀になると、『分析論前書』『分析論後書』『トピカ』『詭弁論駁論』のラテン語訳も流通するようになった。論理学書以外のアリストテレスの重要著作もラテン語に翻訳されはじめたが、注解の対象になったのは主に論理学書であった。『自然学』『形而上学』『魂について』『ニコマコス倫理学』等についてラテン語で注解書が書かれるようになったのは、13世紀を迎えようとする頃からである。

本論は、第一に、13世紀から14世紀初頭までに書かれた『ニコマコス倫理学』の注解書の概要を整理することを目的としている。これらの注解書は未公開のものが多く、基本的な情報を整理しておくことは、今後の13世紀西欧倫理思想の研究にとって不可欠だと思われるからである。第二に、本論はウスター写本 (ms. Worcester Cathedral Library, Q.13) に含まれる『ニコマコス倫理学』注解の起源と著作年代を明らかにすることを意図している。これらの作業を通して、今まで研究者によって論じられたことがない、この『倫理学注解』（本論では『ウスター倫理学注解』と呼ぶ）を研究することが、13世紀西欧倫理思想の研究にどのような意味を持つかを明らかにしたい。

§2：13世紀前半の『ニコマコス倫理学』注解書

以下（§§2～3）では、これまでに研究者によって論じられてきた、13世紀から14世紀初頭までに書かれた『ニコマコス倫理学』注解の基本的情報——写本 (Ms)、出版状況 (Ed)、推定著作年代と内容——を整理している。

13世紀の前半と後半を分けたのは、13世紀の半ば頃から『ニコマコス倫理学』の注解の様式と内容は大きな変化を見せはじめるからである。内容が変化した

最大の要因は、『ニコマコス倫理学』の全体のラテン語訳が広く入手可能になったことにある。1246～1248年頃、ロバート・グロステスト (c.1170-1253) がすでに流通していたラテン語訳を改訂しながら『ニコマコス倫理学』の全訳を完成し¹、同書のギリシア語注解も翻訳した²。グロステストは、草創期のオックスフォード大学に関わり、リンカーンの司教をつとめた人物である。グロステストによる翻訳活動以前に流通していた『ニコマコス倫理学』のラテン語訳は、『新倫理学 (ethica noua)』『旧倫理学 (ethica uetus)』と呼ばれている。『新倫理学』は『ニコマコス倫理学』の第1巻の訳であり、『旧倫理学』は同書第2巻から第3巻の途中 (1119a34) までの訳である。「新・旧」と呼ばれるのは、『旧倫理学』の方が『新倫理学』よりも早い時期にパリで流通したためである。以前は『旧倫理学』『新倫理学』は別の翻訳者によって別の時期に (『旧倫理学』は12世紀、『新倫理学』は13世紀に入ってから) 作成された翻訳だと考えられていたが³、現在では両方とも1150年までにピサのブルグンディオ (Brungundio) によって作成されたというのが定説になっている⁴。

13世紀前半の『ニコマコス倫理学』注解である【EN 1～6】は、すべてパリ大学学芸学部に由来する。【EN 1～5】は、この時期 (1230～1260年頃) にパリ大学学芸学部で広く用いられていた注解形式で書かれている⁵。各注解書、注解書の各部分によって相違はあるが、基本的に、各講義 (lectio) がテキストの分割 (diuisio textus)、講義の内容 (sententia lectionis)、問題 (quaestio) 及び逐語的解説 (lectio litterae) で構成されている。

【EN 1】無名氏『アブランシュ旧倫理学注解 (Commentarium abricense in Ethicam ueterem)』

¹ *Aristoteles Latinus* XXVI 1-3, fasc.3-4. 原本より (Recensio pura) よりも改訂版 (Recensio recognita) の方が広く流通した。

² 以下のギリシア注解が翻訳された。ニケアのエウストラティオス (c.1050/60-c.1120) の『ニコマコス倫理学』第1巻と6巻の注解、無名氏 (3世紀) の同書2巻から5巻までの注解、エベソスのミカエル (fl. 12世紀前半～中盤) の同書5、9、10巻の注解、無名氏 (12世紀) の同書6巻の注解、そしてアスパシウス (c.100-150 AD) の同書8巻の注解である。

³ *Aristoteles Latinus: Ethica Nicomachea* を校訂した R. A. Gauthier はそう考えていたし、Wieland (1982, 657) もその見解を踏襲している。

⁴ Bossier 1997; Buffon 2007, 4, n.11. *Aristoteles Latinus* XXVI 1-3, fasc.2 には (グロステスト以前の) 「旧訳」として『新・旧倫理学』だけではなく Hoferiana (『ニコマコス倫理学』第2巻から8巻の抜粋訳)、Borghesiana (『ニコマコス倫理学』第7巻と8巻) が収められているが、これらはすべて同一の訳者によると考えられている。

⁵ 学芸学部で用いられていた著作形式の詳細と変遷については Weijers 2002 に詳しい。

Ms: Avranches, BM 232, ff.90r-123r.

Ed: Claude Lafleurが準備中。

著作年代: c. 1225-1240年 (知られている限りで最古の『ニコマコス倫理学』注解書)

内容: 『旧倫理学』つまり『ニコマコス倫理学』2~3巻の注解であるが、著者は同書の第1巻についても或る程度の知識を持っていたことが伺える。

【EN 2】 無名氏『倫理学注解 (*Scriptum super librum Ethicorum*)』(通称『ナポリ注解』)

Ms: Napoli, BN VIII, G.8, ff.4r-9v.

Ed: Tracey 2006.

著作年代: 1225-1240年 (Tracey 2006)

内容: 『ニコマコス倫理学』第1巻の4章から10章を注釈している。

【EN 3】 無名氏『新旧倫理学注解 (*Lectura in Ethicam nouam et ueterem*)』
(通称『パリ注解』)

Ms: Paris, BnF lat. 3804A, ff. 140ra-143va; 152ra-159vb; 241va-247vb; Paris, BnF lat. 3572, ff.226ra-235ra. (『新倫理学』注解=ms. 3804A, ff.140ra-143va; 『旧倫理学』注解=ms. 3804A, ff.152ra-159vb; 241va-247vb; ms. 3572, ff.226ra-235ra.)

Ed: 『新倫理学』注解=Gauthier 1975.

『旧倫理学』注解=Irene Zavatteroが準備中で、Prologus は出版済 (Zavattero 2010, 19-33)。

著作年代: 1235-1240年 (Gauthier 1975; Zavattero 2010)

内容: パリ大学学芸学部教師による『新旧倫理学』(=『ニコマコス倫理学』第1~3巻)の注解。Gauthier 1975やZavattero 2010に詳しい情報がある。

【EN 4】 無名氏『旧倫理学注解 (*Lectura in Ethicam ueterem*)』

Ms: Paris, BnF lat. 3804A, 186ra-187vb.

内容: 『ニコマコス倫理学』第2巻1~3章の注解である (Zavattero 2010, 2, n.1)。

【EN 5】 偽ペッカム『新旧倫理学注解 (*Commentarium in Ethicam nouam et ueterem*)』

Ms: [全体] Oxford, Bodleian Library, Lat. misc. c.71, ff.2ra-52rb; Florence, BN Cov. soppr. G.4.853; [部分] Prague, NK III.F.10, ff.12ra-23va; Avranches, BM 232, ff.

123r-125v.

Ed: Valeria Buffonが準備中で、Prologusの校定は出版済 (Buffon 2011, 356-82)。Buffonの未公開の博士論文 (2007) は、Prologusに加え、lectio 21, 22の校定を含んでいる。

著作年代：1240-1244年頃 (Buffon 2011)

内容：フランシスコ会士のヨハネス・ペッカム (Johannes Peckham) の作とする写本があるが、信憑性はない。『新倫理学』について21の講義 (lectio)、『旧倫理学』について24の講義から構成されている。詳細については、この注解に焦点をあてた博士論文であるBuffon 2007を参照。

[EN 6] ロバート・キルウォードビ『倫理学注解 (*Expositio super libros Ethicorum*)』

Ms: [全体] Cambridge, Peterhouse 206, ff.285ra-307vb; [部分] Prague, NK III, F.10, ff.1ra-11vb.

Ed: Anthony Celanoが準備中 (Geistesgeschichte des Mittelaltersから出版予定)。

著作年代: 1240-1245年 (Lewry 1986)

内容：ロバート・キルウォードビ (c.1215-1279) は、イングランドに生まれ、パリ大学で学び、1237年頃学芸学部教師になった。1245年にドミニコ会に入会してイングランドに戻り、1272年カンタベリー大司教になった。1277年にオックスフォードで文法学・論理学・自然哲学にかかわる命題を弾劾している。『倫理学注解』は、パリ大学で学芸学部教師をつとめていた時代の作品と推定されている。アリストテレスが論じている幸福は「よく生きる、善き行いをする」ことだと解釈するなど、13世紀前半に書かれた『ニコマコス倫理学』注解としては画期的な内容を含んでいる。テキストの分割 (diuisio) と解説 (expositio) からなる注解である。

13世紀前半に書かれた『ニコマコス倫理学』注解として知られているのは、以上の6つであるが、当該領域の研究では『学生の手引き』と呼ばれる次の作品も言及されることが多い。

[EN suppl. 1] 『学生の手引き』あるいは『バルセロナの概説 (*Compendium*)』

Ms: Ripoll 109, ff. 134ra-158va.

Ed: Lafleur and Carrier (1992) は暫定的な校定版で、Claude Lafleur が校定版を準備中 (Corpus Christianorum Continuatio Medievalisから出版予定)。

著作年代: 1230-1240 (Lafleur and Carrier)

内容: パリ大学学芸学部の最終試験に向けて準備をする学生のための手引書として書かれたもので、内容は論理学・倫理学・自然哲学の三部門に分かれている⁶。「倫理学」の部分で『ニコマコス倫理学』の解説がなされている。

§3: 13世紀後半の『ニコマコス倫理学』注解

13世紀後半になると、アルベルトゥス・マグヌスとトマス・アクィナスという師弟関係にある二人のドミニコ会士が『ニコマコス倫理学』の注解を手がけた。中世哲学史の中ではよく知られている彼らの作品については残存している写本数が多いため、写本の情報は省略する。

【EN 7】 アルベルトゥス・マグヌス 『倫理学注解 (*Super Ethica*)』

Ed: Kübel 1968-72, 1987.

著作年代: 1250-1252年 (Libera 1990)

内容: 講義と問題を組み合わせた形式の注解である。

【EN 8】 アルベルトゥス・マグヌス 『倫理学 (*Ethica*)』

Ed: Borgnet 1891. (校定版ではない)

著作年代: 1262-1263年 (Libera 1990)

内容: 講義形式の注解で、『ニコマコス倫理学』に関連するトピック (善、幸福、徳等) について論じられている。

【EN 9】 トマス・アクィナス 『倫理学注解 (*Sententia libri Ethicorum*)』

Ed: Gauthier 1969.

著作年代: 1271-1272年 (Torrell 1993)

内容: 『ニコマコス倫理学』で展開されているアリストテレスの教説を、テキストに沿って順に要約・解説している。

以下の著作は注解ではないが、トマスが『神学大全』第II部を書くために準備された、『ニコマコス倫理学』関連の作品である。

⁶ 詳細については、Lafleur and Carrier 1997を参照。

【EN suppl. 2】『「ニコマコス倫理学」の一覧 (Tabula libri Ethicorum)』

Ed: Gauthier 1971.

著作年代：1270年

内容：『ニコマコス倫理学』とアルベルトゥス・マグヌスの同書注解で論じられている主要なトピックの索引で、トマス・アクィナスの秘書が準備した。トマスが十分に手を入れることはなく、未完成のまま残っている。

トマスの『倫理学注解』以降14世紀初頭にかけて、学芸学部教師によって書かれたと推定されている8つの注解【EN 10~18】が知られている。13世紀前半の注解とは異なり、これらの注解は基本的に問題で構成されているので、『倫理学問題集』と呼ばれる。そのほとんど【EN 10~17】がパリ大学に由来するものである。これらパリ大学学芸学部起源の注解は、著名な中世哲学研究者であるマルティン・グラープマン (Martin Grabmann) やゴティエ (R. A. Gauthier) によって「アヴェロエス主義者の注解」と呼ばれ⁷、イスラムの思想家アヴェロエスに端を発する「ラテン・アヴェロエス主義」と関連づけられた。というのも、これらの注解は、ラテン・アヴェロエス主義者をターゲットとしたと解釈される、1277年にパリ司教エティエンヌ・タンピエが発した禁令に抵触しうる主張を含んでいたからである⁸。たとえば「幸福は神によって直接与えられるものではない」という主張がそうである⁹。グラープマンは、「アヴェロエス主義者の注解」がタンピエの弾劾の対象だったと考えていたので、これらの注解の著作年代を1277年以前と推定した。オドン・ロタン (Odon Lottin) にも同様に考えたが¹⁰、ゴティエは1277年以降であるとし、最近の研究はゴティエに従っている¹¹。ゴティエは、「アヴェロエス主義者の注解」にはタンピエの断罪への何らかの配慮が認められるとして、実際の弾劾の対象は「アヴェロエス主義者の注解」よりもラディカルな主張を含んでいたと考えた。最近これらの注解書の校定版作成に精力的にとりくんでいるヤコボ・コスタ (Iacopo Costa) は、ゴティエの仮説を基本的に支持している¹²。

⁷ Grabmann 1931及びGauthier 1947-1948.

⁸ タンピエの禁令が誰をターゲットにしたかという点については解釈が分かれる。また「ラテン・アヴェロエス主義」の教説とされたものは必ずしもアヴェロエス起源ではないことがはっきりしてきたために、1990年代頃からこの名称は使われなくなってきた。禁令については、Piché 1999を参照。

⁹ Anon. of Paris (BnF14698), q. 29; Radulfus Brito, *QEN*, q.32.

¹⁰ Lottin 1950; Giocarnis 1959.

¹¹ Hissette 1976; Celano 1986; Costa 2010.

¹² Costa 2010, 60-61.

コスタは、ゴティエが指摘したフォンテーヌのゴドフロワの『任意討論集』との関連をもとに、【EN 10～16】を【EN 10～13】と【EN 14～16】との2つのグループに分けている。そして前者を1289年以前、後者は1289年以降に書かれた著作だと推定している¹³。前者について、ゴドフロワの「極端な主知主義」への言及が見られないというのがその理由である。ゴドフロワが「極端な主知主義」——知性によって認識されないものは意志の対象にならないから、いかなる意味においても知性が意志よりも高次の能力である——を打ち出したのは、1289年に書かれた『任意問題集』第6巻が最初である。【EN 10～13】は、こうした見解に言及していないから、1289年以前に書かれたものだというのである。しかし、これは「沈黙からの議論 (*argumentum ex silentio*)」であり、強い根拠を持つものではない。当該の著作や議論を知っていても、その内容に言及しないことは十分にありうるからである。

【EN 10】 オーベルニュのペトルス『倫理学問題集 (*Quaestiones super librum Ethicorum*)』

Ms: [部分、Leipzig写本が多くの部分を含む]Leipzig, UB 1386, ff.115ra-126va; Paris, BnF lat. 16110, ff. 276va-277vb.

Ed: Celano 1986.

著作年代: 1277-1283年 (Celano 1986); 1280年代前半 (Costa 2010).

内容: 『ニコマコス倫理学』第1～2巻についての注解問題集。オーヴェルニュのペトルス (Petrus de Alvernia 1304年没) はクロック出身で、1270年代前半にパリ大学学芸学部教師、1296年に同大学神学部教師、1302年にクレルモンの司教になった人物である。彼は自分の作品としてアリストテレスの注解書を書くだけでなく、『政治学注解』をはじめとする、トマス・アクィナスの未完の注解に加筆して完成させている。

【EN 11】 無名氏『倫理学問題集 (*Quaestiones super librum Ethicorum*)』

Ms: Paris, BnF lat. 14698, ff. 130ra-164vb; (『ニコマコス倫理学』1～2巻にかかわる問題の要約) Paris, BnF lat. 15106, ff. 75ra-rb.

Ed: Costa 2010.

著作年代: 1280年頃 (Gauthier 1947-1948); 1280年代前半 (Costa 2010)

¹³ Costa 2010, 91, n. 142.

内容：『ニコマコス倫理学』第1～5巻にかんする問題集。5巻は8問目の途中で終わっている。ドゥエーのヤコブス (Jacobus de Duaco) の作とされたこともあるが、Costa 2010は否定している。

【EN 12】 無名氏『倫理学問題集 (*Quaestiones super librum Ethicorum*)』(通称『エアランゲン注解』)

Ms: Erlangen, UB 213, ff.47ra-80vb.

Ed: Costa が準備中でq.19は出版済 (Costa 2006, 210-212)。q. 122はLottin の研究の中で書写されている (*PEM* IV-2, 612-616)。

著作年代: 1273年頃 (Grabmann 1931; Lottin 1950; Giorcarinis 1959); 1280年代 (Costa 2010)。

内容：『ニコマコス倫理学』全巻についての問題集。Grabmann 1931がとりあげた4つの注解のうちの1つで、Giorcarinis 1959が詳しく論じている。冒頭部の問題のリストがCosta (2011, 98) にある。

【EN 13】 無名氏『倫理学問題集 (*Quaestiones super librum Ethicorum*)』

Ms: Paris, BnF lat. 16110, ff. 236ra-276ra; 277vb-281vb.

著作年代: 1280年代 (Costa 2010)

内容: Costa (2010, 106) によれば、当該の写本の236ra-276raは『ニコマコス倫理学』第1～10巻までの問題集である。276va-277vbで、オーヴェルニュのベトルスの『倫理学問題集』(= **【EN 10】**) から8つの問題が挿入された後、277vb-281vbで26の問題が論じられている。

【EN 14】 オルレアンのアエギディウス『倫理学問題集 (*Quaestiones super librum Ethicorum*)』

Ms: Paris, BnF lat. 16089, ff. 195ra-237vb.

Ed: 第1巻の部分について校訂したCanavesio (1973) は、入手困難な博士論文である (Costa 2006, 192, n.114)。Lottin の研究 (*PEM* IV-2, 601-602; 616-618) の中で部分的 (ff.221rb-221va; 221va-221vb) に書写されている。Costa (2006, 205-207; 208-209) はq.18 (ff.198va-vb) と補足のq.3 (f. 234ra) の校定を出版している。

著作年代: 1273 年 (Lottin 1950); 1286年以降 (Wieland 1982); 1289年以降 (Costa 2010); c.1290-1304年 (Gauthier 1247-48, 224)

内容：Grabmann(1931) とGauthier(1947-48) が注目した倫理学注解の一つ。
Costa(2011, 257-265) に論じられている全問題のリストがある。

【EN 15】 ラドルフス・ブリト『倫理学問題集 (*Quaestiones super librum Ethicorum*)』
(過去の通称『ヴァティカン注解』)

Ms: [q.115のみを欠く、ほぼ完全な写本] Paris, BnF 2172 ff. 1ra-53rb; [部分]
Baltimore, John Hopkins Univ. n.9; Vat. lat. 832; Vat. lat. 2173, ff.1ra-75ra; Paris, BnF
15106, ff.2ra-75ra.

Ed: [Prima recensio] Costa 2008; [Secunda recensio] Costa が準備中。

著作年代：1275年頃 (Lottin 1950 on Vat. lat. 832); 1290年頃 (Gauthier 1947-1948
on Vat. lat. 832 & 2172); 1289-1299 年頃 (Costa 2008 on Prima recensio); 1303-
1304年頃 (Lottin 1950 on Vat. lat. 2173); 1304 年以降 (Gauthier 1947-1948 on
Vat. lat. 2173).

内容：Grabmann(1931) とGauthier(1947-48) が注目した倫理学注解の一つで
あり、同書の第1～7巻及び10巻の注解である。2つの版があり、第1版 (Prima
recensio) の校定版はすでに出版されている。著者は写本に基づきパルマの
アントニウスとされたり (Grabmann 1931, 55-60)、不明とされたりしてきた
(Gauthier 1947-1948) が、Costa(2008) がラドルフス・ブリト (c.1270-c.1320)
と同定した。ラドルフス・ブリトは、ブリュターニュ生まれでパリ大学の学芸
学部教師ついで神学部教師をつとめた人物である。様態論者として重要な思想家
であり、文法学・論理学はもちろん自然学や神学関係の著作も残している。

【EN 16】 無名氏『倫理学問題集 (*Quaestiones super Ethicam*)』

Ms: Erfurt, SB Amplon F13, ff.85ra-117va.

Ed: Costa(2006, 213-215) にq.16 (ff.88rb-va) の校定がある。

著作年代：1273年頃 (Grabmann 1931, Lottin 1950, 128-129); 1289年以降 (Costa
2010)

内容：Grabmann(1931) がとりあげた注解の一つ。『ニコマコス倫理学』第1～
5巻及び8～10巻を注解している。Costa(2011, 265-272) に全問題のリストが
ある。

【EN 17】 無名氏『倫理学問題集 (*Quaestiones super Ethicam*)』

Ms: Paris, BnF lat. 16089, ff. 171rb-180rb.

内容：『ニコマコス倫理学』1～3巻の注解問題集（Gauthier 2002, 133）。解説するのが非常に困難（Gauthier 2002, 133, n. 143；Costa 2008, 146, n.28）。

パリではなくオックスフォード大学の学芸学部に由来するものとして知られているのは、以下の【EN 18】だけである。

【EN 18】 ヨハネス・ティティンザール『倫理学問題集 (*Quaestiones super Ethicam*)』
Ms: [全体、14世紀写本] Oxford, Oriel 33, ff.339ra-382ra；〔部分でいずれも4巻までの13世紀写本、Durham 写本が最古〕Durham Cathedral Library, C.IV.20, ff.196vb-254vb；Cambridge, Gonville and Caius 611/341, ff. 146ra-181vb.

著作年代：1283年

内容：オックスフォード大学学芸学部教師であったヨハネス・ティティンザール（精確なところは不明で、Tytyngsale, Didneshale, Tytensal 等、様々な表記が用いられている）によって書かれた注解。『ニコマコス倫理学』第1～5巻及び10巻の注解問題集。

§4：『ウスター倫理学注解』

『ウスター注解』は、私が知るかぎり、研究者によってこれまでにとりあげられたことがない『ニコマコス倫理学』の注解である。内容から考えると、同書第1巻の注解に相当する。『ウスター注解』と呼ぶのは、ウスター司教座聖堂図書館に所蔵されている写本（Q.13）の一部分（ff.156ra-163ra）であるからである。この写本は、ヨハネス・アストンという一人の人物によって筆写されたことが分かっている。ヨハネス・アストンについては、1294-95年にオックスフォード大学グロスターカレッジで学んだこと、その後ウスター修道院の食料保管係であったことが記録に残っている¹⁴。ウスター司教座聖堂図書館の所蔵の中世写本のカタログを編纂したトムソン（R. M. Thomson）によれば、写本Q.13とQ.33はアストンの大学でのノートである¹⁵。

§4.1：『ウスター倫理学注解』とトマス・アクィナスの著作

『ウスター倫理学注解』の序文の大部分は、トマス・アクィナスの『倫理学注解』の序文に剽窃と言えるほどよく似ている¹⁶。しかし注目すべき僅かな相違もあ

¹⁴ Greatrex (1997, 772) に依拠した、Thomson (2001, 128) に依る。

¹⁵ Thomson 2001, xxvii.

¹⁶ 両者を比較した付録3（後掲）を参照。

る。まず、トマス・アクィナスが『形而上学』の第11巻として引用している箇所を『ウスター倫理学注解』は（現在通用しているように）第12巻として引用している¹⁷。このことは、『倫理学注解』を書いた当時のトマスよりも『ウスター注解』の著者が、『形而上学』の区分（巻数）について新しい知識を持っていたことを示す。さらに、『ウスター倫理学注解』は「論理学 (logica)」「文法学 (grammatica)」「修辞学 (rhetorica)」という名称を挙げつつ、学知 (scientia)の区分について論じている¹⁸。トマスは、品詞問や原理と結論の間の秩序を扱う学知があると主張しているが、それを「理性的哲学 (philosophia rationalis)」と呼んでいる¹⁹。そして、文法学や修辞学にはまったく言及していない。トマスにはない、自由学芸の3学科 (trivium) への強い関心は、『ウスター注解』の著者がこうした学科を教える学芸学部教師だったことに由来すると考えられる。

序文以外でも『ウスター倫理学注解』には、トマスの『倫理学注解』の影響が濃厚に認められる部分がある。それは「ソロンのジレンマ」に対する解釈である。『ニコマコス倫理学』第1巻で、アリストテレスはソロンの言葉をひきながら、人生は死ぬまで紆余曲折があるから人は生きている最中に幸福であると言ったことができないとすれば、死んではじめて幸福と言えるのかと問うている²⁰。しかし、もし（アリストテレスが主張しているように）幸福が魂の活動なら、生きている時にこそ「幸福」と言われるべきである。そうであるとする、「（人が幸福であるか否かを判断するためには）その（人生の）最後を見とどける（ことが必要だ）」というソロンの言葉はどう理解されるべきか。もし死んではじめて「生きていたときは幸福だった」と言う命題が真になるということだとしたらおかしいとトマスは指摘している。というのも、「過去にかんする命題の真理は、現在の命題にかんする命題の真理に依存している²¹」からである。例えば、「（今）晴れている」という命題が現在真でなければ、その翌日になって「（昨日は）晴れていた」という命題が真になることはありえない。『ウスター倫理学注解』は「過去にかんして真なる命題はある時点では現在にかんして真なる命題であった²²」と述べ、トマスと同様の指摘をしている。

¹⁷ Thomas Aquinas, *SLE* I, lect. 1, l. 12; Anon. of Worcester, *QEN*, ms. *W.* f. 156ra.

¹⁸ *QEN*, Prologus, ms. *W.* f. 156ra. (本論付録21頁)

¹⁹ *SLE* I, lect. 1, ll. 32-35.

²⁰ *EN* I, c. 10, 1100a10 sqq.

²¹ *SLE*, I, lect. 15, ll. 128-129.

²² Anon. of Worcester, *QEN*, q. 27, ms. *W.* f. 161ra.

しかし全般的に見れば、『ウスター倫理学注解』は、トマスの『倫理学注解』よりも『神学大全』に類似している。まず、提示されている問題の多くが、トマスの『神学大全』で論じられている問題と類似している²³。また、提示されている反論や解答の議論の構造もしばしば似ている。ただし、『神学大全』で用いられている「至福 (beatitudo)」というタームに代えて「幸福 (felicitas)」というタームが用いられ、『神学大全』では頻出するアウグスティヌスや聖書への言及は排除されている²⁴。

§ 4.2 : 『ウスター倫理学注解』の起源と著作年代

『ウスター倫理学注解』は、13世紀の後半に学芸学部教師によって書かれたものだと考えられる。というのも、『ウスター注解』は著作形式・内容双方の点で、この時期に学芸学部教師によって書かれた『倫理学注解』に類似している。まず、基本的に問題形式で書かれている注解書である。そして、問われている問題が、これらの『倫理学注解』で問われている問題と類似していることが多く²⁵、場合によっては議論の内容も似ている。また、トマスの『神学大全』の影響を強くうけながらも、神学的領域には立ち入らないようにしている点でも一致している。

『ウスター倫理学注解』にはトマスの『神学大全』第II-I部と『倫理学注解』の影響が顕著に認められることから、トマスがこの二つの作品を書き終えた1273年頃以降に書かれた作品であることは間違いない。『ウスター倫理学注解』を含む写本が、筆写者であるヨハネス・アストンの大学でのノートだとすれば、アストンがオックスフォード大学を去った1295年までの作品ということになる。そして写本の文字が整っており、文法的な誤りも少ないことから、アストンがオックスフォード大学で聴いた講義のノートを清書したものだと考えられる。同時期のパリ起源の『倫理学注解』には欠けていることが多い、徳の存在論的考察にかかわる問いが、オックスフォード大学学芸学部教師だったヨハネス・ティティンザールの『倫理学問題集』に揃っていることは²⁶、『ウスター注解』

²³ 論じられている問題の対応関係を、付録2 (後掲) にまとめている。

²⁴ 一例として、『ウスター倫理学注解』第12問とトマスの『神学大全』第II-I部第2問1項とを比較した、付録4 (後掲) を参照。

²⁵ 付録2 (後掲) で、『ウスター倫理学注解』と同時期の7つの学芸学部教師による『倫理学注解』の問題内容の比較を一覧にしている。

²⁶ 付録2 (後掲) で、『ウスター倫理学注解』 (= *W*) の qq. 33-40 と他の『倫理学注解』との対応関係を確認のこと。

がパリではなくてオックスフォードに起源を持つ作品であるとの予測を強めるものである。

§5：結語

13世紀前半に書かれた『ニコマコス倫理学』注解書は、現在校定の作業がすすんでおり、次第にその内容が明らかになりつつある。13世紀後半に書かれた『ニコマコス倫理学』注解書のうち、パリ大学学芸学部教師によるものはグラープマンやゴティエによって重要性が指摘され、最近ではコスタなどにより校定や研究が進んでいる。しかし、オックスフォード大学学芸学部教師によるものは、校定や研究が進んでいないのが現状である。オックスフォード大学学芸学部教師のものと同定される『ウスター倫理学注解』の校定・研究は、この未知の領域に光をあてるものとなるであろう。

- ・本論で用いられているテキストの略号は以下の通りである。

PEM= O. Lottin, *Psychologie et Morale aux XIIe et XIIIe siècle*, Gembloux : J. Duculot, 1948-1960.

QEN = *Quaestiones super librum Ethicorum Aristotelis ad Nicomachum*

SLE = *Sententia Libri Ethicorum*

- ・本論及び付録での公刊テキストの引用は、古典ラテン語の表記法に従って表記やパンクチュエーションを変更している。
- ・本論は、科学研究費補助金若手研究（B）課題番号22722017による研究成果の一部である。

参考文献

Bejczy, I. P. ed. 2008. *Virtue Ethics in the Middle Ages: Commentaries on Aristotle's Nicomachean Ethics, 1200-1500*. Leiden, Boston: Brill.

Borgnet, A. ed. 1891. *Ethica*. Paris: Vivès. (Alberti Magni Opera Omnia, 7.)

Bossier, F. 1997. "L'élaboration du vocabulaire philosophique chez Burgundio de Pise." In *Aux Origines du lexique philosophique européen: L'influence de la Latinitas*, ed. J. Hamesse, Louvain-la-Neuve.

Briggs, C. F. 2010. "Moral Psychology in England after Grosseteste: An Underground History."

- In The Study of Medieval Manuscripts of England*, ed. G. H. Brown and L. E. Voigts, Turnhout: Brepols, 359-388.
- Buffon, V. 2007. *L'ideal éthique de maître ès arts de Paris vers 1250*. Thèse de doctrat, Québec, Faculté de Philosophie, Université Laval.
- 2011. "Anonyme (Pseudo-Peckham), *Lectura cum quaestionibus in ethicam nouam et ueterem* (vers 1240-1244) Prologue." *Recherches de théologie et philosophie médiévale* 78: 297-382.
- Canavesio, E. 1973. "Las Quaestiones supra decem libros ethicorum de Gilles d'Orléans (libro primero)." *Dissertazione di Dottorato*, Louvain: Institut Supérieur de Philosophie Université Catholique de Louvain.
- Caramello, P. ed. 1952. *S. Thomae Aquinatis Summa theologiae*. Marietti.
- Celano, A. J. 1986. "Peter of Auvergne's Questions on Books I and II of the *Ethica nicomachea*: A Study and Critical Edition." *Medieval Studies* 48:1-110.
- Costa, I. 2006. "Il problema dell'omonimia del bene in alcuni commenti scolastici all'*Ethica Nicomachea*." *Documenti e studi sulla tradizione filosofica medievale* 27:158-230.
- 2008. *Le 'questiones' di Rafulfo Brito sull' <<Etica Nicomachea>>: Introduzione e testo critico*. Turnhout: Brepols.
- ed. 2010. *Anonymi Artium Magistri Quaestiones super Librum Ethicorum Aristotelis (Paris, BnF, lat.14698)*. Turnhout: Brepols.
- 2011. "Autour de deux Commentaires inédits sur *l'Éthique à Nicomaque*: Gilles d'Orléans et l'Anonyme d'Erfurt." In *Christian Readings of Aristotle from the Middle Ages to the Renaissance*, ed. L. Bianchi, Turnhout: Brepols, 211-272.
- Fioravanti, G. , C. Leonardi and S. Perfetti, ed. 2002. *Il commento filosofica nell'Occidente latino (secoli XIII-XV)*. Turnhout: Brepols.
- Gauthier, R. A. 1947-1948. "Trois commentaires Averroistes sur *L'Éthique à Nicomaque*." *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen âge* 16:187-336.
- ed. 1969. *Sententia Libri Ethicorum*. 2 vols. (Thomae Aquinatis Opera Omnia issue Leonis 47.)
- ed. 1971. *Tabula Libri Ethicorum*. (Thomae Aquinatis Opera Omnia issue Leonis 48B.)
- ed. 1972-1974. *Aristoteles Latinus XXVI: Ethica Nicomachea*. Turnhout: Brepols.
- 1975. "Le cours sur *l'Ethica Nova* d'un maître ès arts de Paris (1235-1240)." *Archives d'histoire doctrinale et littéraire du moyen âge* 42:71-141.
- 2002. *L'Éthique Nicomaque I-1*, Louvain-le-Neuve: Peeters.

- Giorcarinis, K. 1959. "An unpublished Late Thirteenth Century Commentary on the *Nicomachean Ethics* of Aristotle." *Traditio* 15: 299-326.
- Grabmann, M. 1931. *Der lateinische Averroismus des 13. Jahrhunderts und seine Stellung zur christlichen Weltanschauung: Mitteilungen aus ungedruckten Ethikkomentaren*. Munich: Sitzungberichte der Bayerischen Akademie der Wissenschaften.
- Greatrex, J. 2001. *Biographical Register of the English Cathedral Priories of the Province of Canterbury, c.1066-1540*. Oxford: Clarendon Press.
- Hissette, R. 1976. "La date de quelques commentaires à l'Éthique." *Bulletin de philosophie médiévale* 18: 79-83.
- Kübel, W. ed. 1968-72, 1987. *Alberti Magni Commentum et quaestiones super Ethica*. 2 vols. Münster. (Ed. Colon. 14/1-2.)
- Lafleur C. and Carrier, J.1992. *Le Guide de l'étudiant d'un maître anonyme de la Faculté des arts de Paris au XIIIe siècle. Édition critique provisoire du ms. Barcelona, arxiu de la Àragó, ms. Lipoll 109, 134ra-158va*, Québec. (Publications du laboratoire de philosophie ancienne et medieval de la Faculté de philosophie de l'Université Laval I.)
- Lafleur C. and Carrier, J. ed. 1997. *L'enseignement de la philosophie au XIII^e siècle: Autour de «Guide de l'étudiant» du ms. Ripoll 109*. Turnhout: Brepols.
- Lewry, P. O. 1986. "Robert Kilwardby's Commentary on the *Ethica Noua* and *Vetus*." In *L'homme et son univers au Moyen Âge*, ed. C. Wenin, Louvain-la-Neuve: Institut supérieur de philosophie, 799-807.
- Libera, A. 1990. *Albert le Grand et la Philosophie*. Paris: J. Vrin.
- Lottin, O. 1948-1960. *Psychologie et Morale aux XIIe et XIIIe siècles*, Gembloux : J. Duculot.
- , 1950. "A propos de certain commentaires sur l'Éthique." *Recherches de théologie ancienne et médiévale* 17: 127-133.
- Piché, D. 1999. *La condamnation de 1277*. Paris: J. Vrin.
- Thomson, R. M. 2001. *A Descriptive Catalogue of the Medieval Manuscripts in Worcester Cathedral Library*. Cambridge: Brewer.
- Torrell, J.-P. 1993. *Initiation à Saint Thomas d'Aquin: Sa personne et son oeuvre* Fribourg: Cerf.
- Tracey, M. J. 2006. "An Early 13th-Century Commentary on Aristotle's *Nicomachean Ethics* I, 4-10: The *Lectio cum quaestionibus* of an Arts-Master at Paris in MS Napoli, Biblioteca Nazionale VIII G.8, ff.4r-9v." *Documenti e studi sulla tradizione filosofica medievale* 17:23-69.
- Weijers, O. 2002. "La structure des commentaires philosophique à la Faculté des arts: quelques

- observations." In Fioravanti *et al* ed. 2002, 17-41.
- Wieland, G. 1981. *Ethica-scientia practica: Die Anfänge der philosophischen Ethik in 13. Jahrhundert*. Münster: Aschendorff.
- . 1982. "The Reception of Aristotle's Ethics." In *The Cambridge History of Later Medieval Philosophy*, ed. A. Kenny, N. Kretzmann and J. Pinborg, Cambridge: Cambridge University Press, 652-672.
- Zavattero, I. 2010. "Le prologue de la *Lectura in Ethicam veterem* du «*Commentaire de Paris*» (1235-1240) : Introduction et texte critique." *Recherches de théologie et philosophie médiévale* 77: 1-33.

付録 1 : 『ウスター倫理学注解』で論じられている問題

1. Utrum de rebus humanis possit esse scientia. (156rb)
2. Utrum haec scientia sit de summo bono humano. (156rb)
3. Utrum omnia bonum appetunt. (156va)
4. Utrum illud bonum quod ab omnibus appetitur sit primum bonum sicut Deus. (156vb)
5. Utrum operatio possit esse finis ultimus in aliquo genere. (157ra)
6. Utrum iuuenis sit conueniens auditor huius scientiae. (157rb)
7. Utrum uirtuosus sit conueniens auditor huius scientiae. (157va)
8. Utrum sit aliquis ultimus finis. (157va)
9. Utrum in uoluptate consistit felicitas. (157vb)
10. Utrum felicitas sit in honoribus. (158ra)
11. Utrum honor sit magis in honorante quam in honorato sicut dicit Aristoteles. (158ra)
12. Utrum felicitas consistat in diuitiis. (158rb)
13. Utrum sit ponere bonum uniuersalem separatum sicut ponit Plato. (158va)
14. Utrum amicus debet reprobare falsam opinionem sui amici. (158va)
15. Utrum felicitas sit finis ultimus omnium humanorum actuum. (159ra)
16. Utrum felicitas sit perfectissimum. (159ra)
17. Utrum felicitas sit operatio. (159rb)
18. Utrum felicitas consistit in operatione sensus. (159va)
19. Utrum felicitas consistat in operatione intellectus uel uoluntatis. (159va)
20. Utrum felicitas consistat in operationibus intellectus practici uel speculatiui. (159vb)
21. Utrum felicitas consistat in speculatione diuinae essentiae siue naturae. (160ra)
22. Utrum delectatio requiratur ad felicitatem. (160rb)
23. Quid sit principalius in felicitate an speculatio an delectatio. (160rb)
24. Utrum ad felicitatem requiratur abundantia bonorum fortunae. (160va)
25. Utrum amici pertineant ad felicitatem. (160va)
26. Utrum puer aliquis sit felix. (160vb)
27. Utrum homo possit dici felix in uita ista. (160vb)
28. Utrum unus homo possit felicior esse alio. (161ra)
29. Utrum homo felix possit amittere felicitatem. (161rb)
30. Utrum fortunae amicorum uiuentium redundent in mortuos. (161rb)
31. Utrum uirtus moralis sit magis permanens quam scientia. (161va)
32. Utrum felicitas sit in numero bonorum laudabilium. (161va)
33. Utrum uirtus sit in potentia animae ut in subiecto. (161vb)
34. Utrum una uirtus possit esse in diuersis potentiis ut in subiecto. (161vb)
35. Utrum intellectus sit subiectum uirtutis. (162ra)
36. Utrum uis irascibilis et concupisibilis sint subiectum uirtutis. (162rb)
37. Utrum istae uires oboediant rationi. (162rb)
38. Utrum aliqua uirtus possit esse in uiribus interioribus apprehensiuis cuiusmodi sunt memoratiua, phantastica et cogitatiua. (162va)
39. Utrum aliqua uirtus sit in uoluntate ut in subiecto. (162vb)
40. Utrum uirtus intellectualis distinguatur a morali. (162vb)

付録2：『ウスター倫理学注解』とトマスの『神学大全』と同時期の『倫理学注解』の問題内容の比較

W = Anon. of Worcester, *Quaestiones super librum Ethicorum*

ST = Thomas Aquinas, *Summa theologiae*

T = John of Tytynsale, *Quaestiones super librum Ethicorum*

A = Peter of Auvergne, *Quaestiones super librum Ethicorum*

P = Anon. of Paris (BnF 14698), *Quaestiones super librum Ethicorum*

E = Anon. of Erlangen, *Quaestiones super librum Ethicorum*

B = Radulfus Brito, *Quaestiones super librum Ethicorum*

F = Anon. of Erfurt, *Quaestiones super librum Ethicorum* (Costa 2011, 265-272のリストに基づく)

O = Gilles of Orléans, *Quaestiones super librum Ethicorum* (Costa 2011, 257-265のリストに基づく)

W	ST	T	A	P	E	B	F	O
q. 1		q. 1	q. 4	q. 4		q. 1	q. 1	q. 1
q. 2					q. 4	q. 3	q. 2	
q. 3		q. 6	q. 9	q. 7	q. 8	q. 4	q. 5	q. 4
q. 4								
q. 5								
q. 6		q.12	q.18			q.13		
q. 7								
q. 8	II-1, q.1, a.4	q. 9	q.13	q.11	q.12	q.10	q. 7	q.10
q. 9	II-1, q.2, a.6	q.15	q.20	q.17	q.13	q.14	q.10	q.11
q.10	II-1, q.2, a.2	q.16	q.21	q.18	q.14	q.15	q.11	q.12
q.11			q.22		q.15	q.16	q.12	
q.12	II-1, q.2, a.1	q.18	q.23	q.19	q.16	q.18	q.14	q.15
q.13			q.24		q.19	q.20	q.16	q.17
q.14		q.20	q.26		q.17	q.19	q.15	q.16
q.15								
q.16		q.23	q.27	q.22	q.18	q.23	q.18	q.19
q.17	II-1, q.3, a.2	q.25	q.29	q.25	q.21	q.27	q.19	q.21
q.18	II-1, q.3, a.3	q.26	q.30					
q.19	II-1, q.3, a.4	q.27	q.31		q.25	q.29	q.22	q.24
q.20	II-1, q.3, a.5	q.28	q.32					
q.21	II-1, q.3, a.8							
q.22	II-1, q.4, a.1	q.30	q.33	q.27	q.23	q.30	q.21	
q.23	II-1, q.4, a.2		q.34					q.23
q.24			q.35 & 36	q.28	q.24	q.31		
q.25	II-1, q.4, a.8							
q.26								
q.27	II-1, q.5, a.3		q.39			q.34		
q.28	II-1, q.5, a.2	q.34				q.35		
q.29	II-1, q.5, a.4	q.33	q.40		q.27		q.24	q.26
q.30		q.35	q.41	q.30		q.36		
q.31								
q.32		q.36	q.44.	q.32		q.38	q.25	q.27
q.33	II-1, q.56, a.1	q.38				q.41	q.26	q.28
q.34	II-1, q.56, a.2	q.39						
q.35	II-1, q.56, a.3	q.40						
q.36	II-1, q.56, a.4	q.41		q.33				
q.37	I, q.81, a.3	q.37	q.47			q.40		
q.38	II-1, q.56, a.5	q.42						
q.39	II-1, q.56, a.6	q.43						
q.40	II-1, q.58, a.2	q.44						

付録3：『ウスター倫理学注解』序文とトマス『ニコマコス倫理学注解』序文との比較

トマス『注解』序文 (ed. Gauthier, *SLE*, Prologus, ll.1-106.)

Sicut philosophus dicit in principio *Metaphysicae*, sapientis est ordinare. Cuius ratio est quia sapientia est potissima perfectio rationis, cuius proprium est cognoscere ordinem. Nam etsi uires sensitiuae cognoscant res aliquas absolute, ordinem tamen unius rei ad aliam cognoscere est solius intellectus aut rationis.

Inuenitur autem duplex ordo in rebus. Unus quidem partium alicuius totius seu alicuius multitudinis ad inuicem, sicut partes domus ad inuicem ordinantur; alius autem est ordo rerum in finem. Et hic ordo est principalior quam primus. Nam, ut philosophus dicit in *XI Metaphysicae*, ordo partium exercitus ad inuicem est propter ordinem totius exercitus ad ducem.

Ordo autem quadrupliciter ad rationem comparatur. Est enim quidam ordo quem ratio non facit, sed solum considerat, sicut est ordo rerum naturalium. Alius autem est ordo, quem ratio considerando facit in proprio actu, puta cum ordinat conceptus suos ad inuicem et signa conceptuum, quae sunt uoces significatiuae. Tertius autem est ordo quem ratio considerando facit in operationibus uoluntatis. Quartus autem est ordo quem ratio considerando facit in exterioribus rebus quarum ipsa est causa, sicut in arca et domo.

『ウスター注解』序文 (ms. *W.*, ff. 156ra-156rb)

Sapientis est ordinare. Cuius ratio est quia solius rationis est cognoscere ordinem. Licet enim uires sensitiuae cognoscant aliquid ut uirus colorem, non tamen cognoscunt aliquem ordinem unius ad alium, siue sit ordo multorum inter se siue multorum respectu finis.

Sic dicitur in *XII Metaphysica*: duplex est ordo rerum. Quidam est ordo, qui est partium alicuius totius, sicut in exercitu. Alius est ordo alicuius multitudinis in comparatione ad finem, ut ad ducem. Et secundus ordo est principalior, sicut ibidem habetur, quia partes non habent ordinem nisi propter finem.

Sed ordo se habet ad rationem quadrupliciter. Quidam est ordo quem ratio non facit sed in rebus considerat ipsum. Cuiusmodi est ordo naturalium. Alius est ordo quem facit ratio, sicut quando ratio ordinat conceptus suos et similiter signa conceptuum. Unde inter conceptus est ordo et similiter inter signa siue inter uoces. Tertius etiam ordo quem facit ratio est in considerando in operationibus uoluntariis ordinatis ad ultimum finem, sicut in operationibus continentiae et temperantiae. Ratio facit ut suae operationes sint ordinatae ad finem ultimum. Quartus est ordo quem facit ratio sed facit ipsum in exterioribus, ita quod exteriora sunt causata (*ms. causa*), sicut patet in arca et domo.

Et quia consideratio rationis per habitum scientiae perficitur, secundum hos diuersos ordines quos proprie ratio considerat sunt diuersae scientiae. Nam ad philosophiam naturalem pertinet considerare ordinem rerum quem ratio humana considerat sed non facit; ita quod sub naturali philosophia comprehendamus et mathematicam et metaphysicam. Ordo autem quem ratio considerando facit in proprio actu, pertinet ad rationalem philosophiam, cuius est considerare ordinem partium orationis ad inuicem et ordinem principiorum in conclusiones. Ordo autem actionum uoluntariarum pertinet ad considerationem moralis philosophiae. Ordo autem quem ratio considerando facit in rebus exterioribus constitutis per rationem humanam pertinet ad artes mechanicas. Sic igitur moralis philosophiae, circa quam uersatur praesens intentio, proprium est considerare operationes humanas, secundum quod sunt ordinatae ad inuicem et ad finem.

Dico autem operationes humanas, quae procedunt a uoluntate hominis secundum ordinem rationis. Nam si quae operationes in homine inueniuntur, quae non subiacent uoluntati et rationi, non dicuntur proprie humanae, sed naturales, sicut patet de operationibus animae uegetabilis, quae nullo modo cadunt sub consideratione moralis philosophiae.

Sicut igitur subiectum philosophiae naturalis est motus uel res mobilis, ita etiam subiectum moralis philosophiae est operatio humana ordinata in finem uel etiam homo prout est uoluntarie agens propter finem.

Sed tamen non est nisi duplex ordo, uel aliquarum partium totius inter se uel respectu finis. Verumptamen quadruplex est ordo in comparatione ad finem. Propter ea 4 sunt genera scientiarum. Primus ordo quem non facit ratio sed considerat in rebus pertinet ad scientias reales, cuiusmodi sunt naturalis, mathematica et diuina, sexto *Metaphysicae*. Et istae tres continentur sub naturali philosophia communiter dicta. Secundus ordo qui fit a ratione in proprio actu rationis, pertinet ad rationalem scientiam. Aut enim considerat ratio quantum ad ordinem partium orationis, et sic pertinet ad grammatica; aut considerat quantum ad ordinem principiorum respectu conclusionis, et sic pertinet ad logicam; aut considerat quantum ad ordinem sermonis ornati et ordinati, et sic pertinet ad rhetorica. Tertius ordo pertinet ad moralem scientiam, de qua est praesens intentio. Quartus uero pertinet ad mechanicam.

Ex hoc patet quid est subiectum huius, quia considerat operationes humanas, quae fiunt a uoluntate, ordinatas ad finem debitum. Et dico a uoluntate, quia illas (*ms. illi*) operationes quae non subiacent rationi ut operationes uegetatiuae non considerat ratio.

Sicut in naturalibus res in motu est subiectum, sic operationes humanae uel ipse homo in quantum ad tales operationes comparatur uel ipsum summum bonum ipsius hominis est subiectum huius.

Sciendum est autem, quod quia homo naturaliter est animal sociale, utpote qui indiget ad suam uitam multis, quae sibi ipse solus praeparare non potest; consequens est quod homo naturaliter sit pars alicuius multitudinis, per quam praestetur sibi auxilium ad bene uiuendum.

Quo quidem auxilio indiget ad duo. Primo quidem ad ea quae sunt uitae necessaria, sine quibus praesens uita transigi non potest: et ad hoc auxiliatur homini domestica multitudo, cuius est pars. Nam quilibet homo a parentibus habet generationem et nutrimentum et disciplinam et similiter etiam singuli, qui sunt partes domesticae familiae, se inuicem iuuant ad necessaria uitae.

Alio modo iuuatur homo a multitudine cuius est pars ad uitae sufficientiam perfectam, scilicet ut homo non solum uiuat sed et bene uiuat, habens omnia quae sibi sufficiunt ad uitam. Et sic homini auxiliatur multitudo ciuilis, cuius ipse est pars, non solum quantum ad corporalia, prout scilicet in ciuitate sunt multa artificia, ad quae una domus sufficere non potest, sed etiam quantum ad moralia, in quantum scilicet per publicam potestatem coercentur insolentes iuuenes metu poenae, quos paterna monitio corrigere non ualet.

Sciendum est autem quod hoc totum, quod est ciuilis multitudo uel domestica familia habet solam ordinis unitatem, secundum quam non est aliquid simpliciter unum.

Ut magis in speciali accedamus ad propositum, nota quod homo est animal sociale indigens multis quae sibi parare non potest. Ideo oportet quod sit <pars> alicuius multitudinis ut a multitudine recipiat necessaria.

Indiget enim duobus, scilicet necessariis uitae. Similiter indiget moralibus. Propter primum, oportet quod sit pars multitudinis domesticae, ut habeat a parentibus generationem, esse et alimentum et aliquam doctrinam. Sed ista non sufficiunt sibi. Non enim in quacumque domo una sunt omnia necessaria artificialia (*ms.* artificia) .

Ideo oportet quod homo sit pars multitudinis ciuilis, quia quamuis in una domo uel familia non sint omnia necessaria artificialia, tamen in ciuitate sunt. Et sic potest prouidere sibi quantum ad necessaria uitae, nec solum propter necessaria uitae. Est necessarium quod homo sit pars ciuitatis sed propter mores, quia aliquando pater familias per (*ms.* propter) admonitionem suam non potest corripere delinquentes de familia sua. Ideo est potestas publica ut quos pater familias non potest recta habere a uitis per admonitionem suam, metu poenae publicae potestatis castigentur.

Et quia homo est pars domesticae familiae et ciuilis, propter ea triplex est operatio. De hac est haec scientia.

Et ideo pars huius totius potest habere operationem, quae non est operatio totius, sicut miles in exercitu habet operationem quae non est totius exercitus. Habet nihilominus et ipsum totum aliquam operationem quae non est propria alicuius partium sed totius, puta conflictus totius exercitus. Et tractus nauis est operatio multitudinis trahentium nauem. Est autem aliud totum quod habet unitatem non solum ordine sed compositione, aut colligatione, uel etiam continuitate, secundum quam unitatem est aliquid unum simpliciter. Et ideo nulla est operatio partis quae non sit totius. In continuis enim idem est motus totius et partis. Et similiter in compositis uel colligatis, operatio partis principaliter est totius. Et ideo oportet quod ad eandem scientiam pertineat consideratio talis totius et partis eius. Non autem ad eandem scientiam pertinet considerare totum quod habet solam ordinis unitatem et partes ipsius.

Et inde est quod moralis philosophia in tres partes diuiditur, quarum prima considerat operationes unius hominis ordinatas ad finem, quae uocatur monastica. Secunda autem considerat operationes multitudinis domesticae, quae uocatur oeconomica. Tertia autem considerat operationes multitudinis ciuilis, quae uocatur politica.

Prima operatio pertinet ad unum hominem respectu summi boni. Secunda uero est respectu familiae. Tertia est respectu ciuilis multitudinis, ubi est unitas ordinis tantum. Ibi non unitas tantum sed ubi est unitas colligationis uel continuationis, ut in domo uel in aliis. Sed in multitudine ciuili non est unitas per continuationem nec per colligationem. Ideo operatio non est una. Quando uero ex multis partibus constituitur unum, operatio partis est operatio totius ut uisus qui est oculi est animalis. Sed quando est unitas ordinis tantum, operatio partis non est operatio totius, ut pugna unius militis non est conflictus totius exercitus.

Propter hoc diuiditur haec in tres partes. Quaedam pars considerat operationes unius hominis ordinatis ad finem et dicitur monastica. Secunda considerat operationes multitudinis domesticae et dicitur oeconomica. Tertia considerat operationes multitudinis ciuilis et dicitur politica.

付録 4: 『ウスター倫理学注解』とトマス『神学大全』との比較

トマス『神学大全』II-I部第2問1項
(ed. P. Caramello)

Utrum beatitudo hominis consistat in diuitiis.

Ad primum sic proceditur. Videtur quod
beatitudo hominis in diuitiis consistat.

<1> Cum enim beatitudo sit ultimus finis
hominis, in eo consistit quod maxime in
hominis affectu dominatur. Huiusmodi autem
sunt diuitiae, dicitur enim *Eccle. X*: Pecuniae
oboediunt omnia. Ergo in diuitiis beatitudo
hominis consistit.

<2> Praeterea, secundum Boethium, in III *de
Consol.*, beatitudo est status omnium bonorum
aggregatione perfectus. Sed in pecuniis omnia
possideri uidentur, quia, ut Philosophus dicit
in V *Ethic.*, ad hoc nummus est inuentus, ut sit
quasi fideiussor habendi pro eo quodcumque
homo uoluerit. Ergo in diuitiis beatitudo
consistit. ...

Sed contra, bonum hominis in retinendo
beatitudinem magis consistit quam in emittendo
ipsam. Sed sicut Boethius in II *de Consol.* dicit,
diuitiae effundendo, magis quam coaceruando,
melius nitent, siquidem auaritia semper
odiosos, claros largitas facit. Ergo in diuitiis
beatitudo non consistit.

Respondeo dicendum quod impossibile est
beatitudinem hominis in diuitiis consistere.
Sunt enim duplices diuitiae, ut Philosophus
dicit in I *Polit.*, scilicet naturales, et artificiales.
Naturales quidem diuitiae sunt, quibus homini
subuenitur ad defectus naturales tollendos: sicut
cibus, potus, uestimenta, uehacula et habitacula,
et alia huiusmodi. Diuitiae autem artificiales
sunt, quibus secundum se natura non iuuatur, ut
denarii;

『ウスター注解』12問 (ms. W, 158rb-va)

Utrum felicitas consistat in diuitiis.

Quod sic uidetur. ...

<1> ...

<2> Item quod maxime dominatur in affectum
hominum uidetur esse felicitas, et ultimus finis.
Sed diuitiae sunt huiusmodi, quia loquimur de
praesenti felicitate.

<3> Item Boethius in *De consolatione*:

Beatitudo est status omnium bonorum
congregatione perfectus. Sed diuitiae consistunt
perfectum aggregatione habendi pro eo
quicumque huiusmodi uoluerit homo, quinto
huius. Quia nummus ad hoc inuentus est, ut
si fideiussor habendi pro eo quicquid uoluerit
homo. Ergo ut "diuitiae etc."

Ad oppositum est Aristoteles. Item per
rationem summum bonum hominis non potest
esse in emittendo felicitatem sed in retinendo.
Boethius in *De consolatione*: melius effundere
quam retinere diuitias et magis nitent in
effundendo quam in aggregando. Aristoteles:
auarus habetur odiosus ab omnibus

Ad quaestionem dicendum quod duo sunt
genera diuitiarum, scilicet diuitiae naturales
quae subueniunt homini ad tolerandum defectus
a parte corporis. Diuitiae aliae sunt artificiales
quae non iuuant hominem ad tolerandum
defectus corporis immediate, quas facit ars ut
sit in mensuram uel pretium rerum uenialium,
cuiusmodi est denari. Quia denari immediate
non subueniunt homini, sed per eos emuntur
necessaria.

sed ars humana eos adinuenit propter facilitatem commutationis, ut sint quasi mensura quaedam rerum uenaliū.

Manifestum est autem quod in diuitiis naturalibus beatitudo hominis esse non potest. Quaeruntur enim huiusmodi diuitiae propter aliud, scilicet ad sustentandam naturam hominis. Et ideo non possunt esse ultimus finis hominis, sed magis ordinantur ad hominem sicut ad finem. Unde in ordine naturae omnia huiusmodi sunt infra hominem, et propter hominem facta; secundum illud *Psalmi VIII*, omnia subiecisti sub pedibus eius.

Diuitiae autem artificiales non quaeruntur nisi propter naturales. Non enim quaerentur, nisi quia per eas emuntur res ad usum uitae necessariae. Unde multo minus habent rationem ultimi finis. Impossibile est igitur beatitudinem, quae est ultimus finis hominis, in diuitiis esse.

Ad primum ergo dicendum quod omnia corporalia oboediunt pecuniae, quantum ad multitudinem stultorum, qui sola corporalia bona cognoscunt, quae pecunia acquiri possunt. Iudicium autem de bonis humanis non debet sumi a stultis, sed a sapientibus, sicut et iudicium de saporibus ab his qui habent gustum bene dispositum.

Ad secundum dicendum quod pecunia possunt haberi omnia uenalia, non autem spiritualia, quae uendi non possunt. Unde dicitur *Prouerb. XVII*: Quid prodest stulto diuitias habere, cum sapientiam emere non possit?

Locendo de diuitiis primo modo in eis non consistit felicitas, cum ordinetur ad sustiendum naturam hominis et ita propter aliud. Et ita felicitas non est in eis.

Secundo modo summendo diuitias, minus in eis est felicitas, quia istae diuitiae sunt propter alias, ut per eas aliae emanent. Et ideo magis remotae sunt a felicitate. Unde neutro modo in diuitiis consistit felicitas. ...

Ad secundam rationem, dicendum quod in illo maxime consistit felicitas quod maxime dominatur in affectum studiosi hominis et non cuiuscumque. Non enim debet fieri iudicium secundum iudicium cuiuscumque. Sicut patet in saporibus non est iudicandum secundum febricitantes, sic ex parte ista. Cum autem sumatur minor autem ad iudicium uirtuosi, minor erit falsa.

Ad tertiam dicendum quod per nummum non potest homo emere quicquid uoluerit, quia non bona animae, sed minima bona uenalia. Ideo ratio supponit falsum, supponendo quod nihil sit bonum nisi quod potest emi. Per diuitias corporalia bona solum emuntur, quae sunt minima. Sed felicitas est summum et maximum bonum quod per diuitias emi non potest.